

第5回 石切丁場に残る残念石

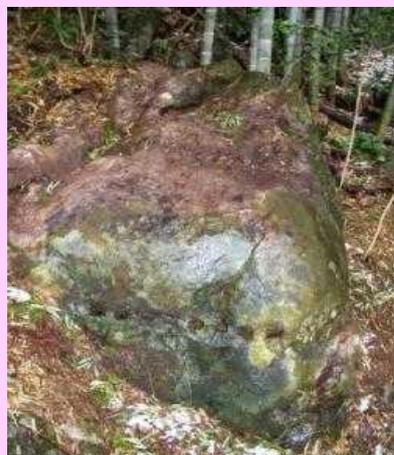
松江城には大量の石材が使われています。『千鳥城取立古説』等によると、矢田山・嫁ヶ島・荒隈山や忌部・川津・大井・大海崎など、諸方より運び込まれたとあります。確かに、石垣を丁寧に見ると、肌合いや色調の違う石材が混じっていることに気づきます。事実、『重要文化財松江城天守修理工事報告書』には、天主台石垣は大海崎産の安山岩と矢田産の玄武岩からなると報告されています。

ところで、石材の端に歯形のような窪みが連なったり、小さな長方形の穴が等間隔に並んだ石材のあることに気づきでしょうか。これは母岩から石垣用の石材を採るために穿たれた矢穴なのです。

つまり、採石は、まず自然の転石の周囲を掘って運び出しやすくしたうえで、石の目(節理や鉱物の配列によって、方向性をもって割れるポイント)を確認しながらタガネで矢穴を掘っていきます。その後、矢穴にクサビ(矢)を入れてゲンノウで叩いて母岩を割り、これを何度かくり返して立方体の石材に加工していくわけです。ですから、江戸城のための伊豆半島や徳川期の大坂城のための六甲山地など、他の採石場や文献史料でも「石切丁場」の用語が定着していますが、岩盤からその一部を切り出したり、のこぎり状の工具で石材を切るわけでもないので、本当は「石切」と呼ぶより「石割」と言うほうが実態を反映しています。

なお、さらに家紋などを彫り込んで目印とすることもあります。堀尾家の分銅紋を入れた花崗岩は、兵庫県の芦屋から西宮にかけての東六甲山地や瀬戸内海の岡山県前島の石切丁場に残されています。堀尾忠晴が、幕府の命令で大坂城の再建工事に動員されたことを物語るものです。

さて、松江城の石切丁場はどこにあったのでしょうか。大井町岩汐地内に矢穴を残した石材のあることは、以前から知られていました。この一帯は嵩山・和久羅山を構成する安山岩からなっています。つまり、朝酌から上東川津を結ぶラインから東側はこの岩石で、これが大海崎石と呼ばれているのです。



岩汐地内の残念石

全身に合計46個もの矢穴を穿たれながらも、頑としてそれを拒んだアツパレな頑固者

このたび精査したところ、南向き斜面に点在する大小13個の転石に多数の矢穴を確認することが出来ました。(写真上)このうち、東端に位置する長径約3.3メートル、短径約2.5メートル、高さ約1.1mの転石には、長短4列合計46個の矢穴が残されていました。

三方を矢穴の列で囲まれた部分を測ってみますと、長径85センチメートル、短径75センチメートル、高さ50センチメートル程度の、一方が丸みを帯びた立方体となります。ただ、矢穴の大きさと間隔を計測しますと、長辺5～7センチメートル、短辺3.5～4.5センチメートル、深さ7～10センチメートル程度で、間隔は3～5センチメートルとなり、やや小ぶりの矢穴を多数穿って切り出そうとしています。

松江城大手門の東側取付石垣に使われている長径約95センチメートル、短径約50センチメートルの石材には、長辺9.5～11センチメートル、短辺4～5センチメートル(但し実測値の2倍)、深さ5～8センチメートルで、間隔3～4センチメートルの矢穴痕が残されています。また、北惣門門前の南側石垣には、二列の矢穴を伴う長径約135センチメートル、短径約105センチメートルの石が積まれています。(写真下)この矢穴は、長辺5～7.5センチメートル、短辺3～4センチメートル、深さ3.5～6センチメートル、間隔は5.5～11センチメートルです。



北惣門門前に残る不揃いな矢穴

左列は斜めに矢穴を掘ろうとしているが、軸線がそろっていない 右列の矢穴は長辺が18cmもある

伊豆の石切丁場では、長辺が慶長期の20～18センチメートル程度から時代が下るにつれて小型化すると考えられています。『石垣が語る江戸城』したがって、岩汐地内の石切丁場を松江城のための、それも築城時のものと速断するにはまだためらいがあります。

なお、二列の矢穴を伴う北惣門の石材は、二度も矢穴を穿たれながらも割れることなく、その後に別の目に矢穴を穿たれてようやく割られたことがわかります。逆に、端に菌形のような矢形痕が残る大手門の石材は、石工の手にかかって割られたために矢形の痕跡が連なるわけです。岩汐地内の矢穴を伴う転石は、割ろうとして割れなかった石材です。

このように、城郭石垣の石材として利用されなかった石は、残念石と呼ばれています。ですが、見方を変えれば、人間の思惑をはねつけて頑として意志を貫いた「頑固石」とでも呼ぶべきではないでしょうか。しかし、そのお陰で、私たちは石切丁場の存在や石切り技法を学ぶことが出来るわけです。

実は、岩汐の谷斜面で、一石々々を点検して矢穴や矢穴痕を残した転石を発見し、その上で矢穴を一個ずつ計測するという手間のかかる調査を実施したのは、市史編纂委員である乾隆明さんの呼びかけに応じていただいた、山歩きになれたアウトドア同好会・山歩会・ハイキングクラブの皆さんでした。その後も、大海崎町の障子谷地内で、一筋々々の枝谷ごとにその斜面をジグザグに下りながら、矢穴や矢穴痕の残された石材の調査を行ってもらっています。まだ、刻印を伴う石材はおろか矢穴も見つかってはいませんが、今後継続して調査していただけることになっています。

このように、それぞれの特技や経験を生かして、『松江城』編に限らず松江市史の編纂のために市民の皆様がご協力くださるようお願いいたします。

(平成 23 年 2 月 1 日 文化財課史料編纂室 山根正明)